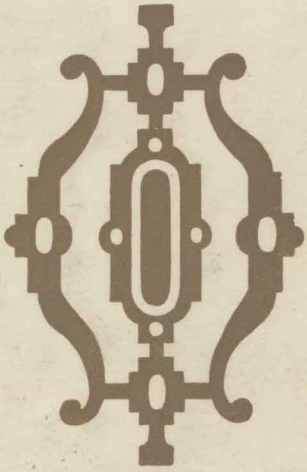

古典読解辞典

白石大二
新間進一
広田栄太郎
松村明
共編

東京堂出版

古典読解辞典

定価は箱またはカバーに表示してあります。

昭和二八年一一月二〇日　初版発行
昭和五〇年三月一日　二四版発行

編者　白石大二
　　新間進一
　　広田栄太郎
　　松村明

発行者　岩出貞夫

印刷所　文殊印刷有限会社

製本所　渡辺製本株式会社

発行所　株式会社　東京堂出版

東京都千代田区神田錦町三ノ五（〒一〇一）
電話東京二九一局八二二六　振替東京二七〇

1591—128010—5164

©1953

序

古典はその国の文化を知る基準になるものである。日本の古典は日本の文化の依り所である。もとより古典はそのままでは現代に生きていないとも言える。古典をより所にして新しく創造されるのである。古典文学はそのまま現代の文学とはならない。然し万葉集や源氏物語などの日本の古典は何等かの意味で現代の文学の中に生きて居る筈である。現代の文化や生活の中に古典は根柢として存している。ただ古典には一面に古代性がある。古典文学はその作られた年代の古いために理解し難い点がある。従ってこれを理解するために種々の手続きを必要とする。書誌学的研究や本文批評的研究や注釈的研究のような所謂文献学的研究の操作が必要となるのもそのためである。万葉集や源氏物語などに古来多く注釈書が作られて居るのもそのためである。いわば古典にかぶさって居る蜘蛛の巣を払いのけてはじめて古典の真の意義が理解されるのである。

古典を理解するために一々の古典についての注釈その他の作業を行うとともに、すべての古典に共通する理解の鍵となるものが辞典である。多くの古典から語彙のみならず、古典の種々の問題をすべてとりあげこれを明らかにした辞典もあるべきである。古典や古典文学に於て理解の困難な点をすべて解決することの出来る辞典もあってよいのである。

このたび白石大二、新間進一、広田栄太郎、松村明、の四氏によってなされた古典読解辞典はそのような役目をはたす辞典である。四氏はさきに国語教育辞典を編纂してこの方面に比類なき成果をあげられたのであるが、その成果の上にたって再びこの新しい試みをなされたのである。そのような辞典編纂の経験のみならず、いずれもすぐれた学問的実力を有して居り勤勉事にあたってやまない熱意

を有して居る。本書がその意図を十分に果して居ることは言うまでもない。本書を見ると日本の古典文学に於て起る種々の問題を明確に解説して居る。主要なる古典文学の作品はとりあげてこれにかなり精細な解説を行っている。その他言語、修辞、文化、有職故実に関する事がらをはじめ種々の事項にわたってゆきとどいた解説を行っている。

もとより新しい試みであるために実際使用して見て種々の希望も出て来るかも知れない。古典文学作品のえらび方、事項の取りあげ方は適切であるが、更に部分的には加うべき点があるかも知れないが、それは次第に改めてゆけばよい。私はこのような古典読解を目標とした辞典が同学の士によって完成したことを心より喜び一言記して序とする次第である。

昭和二十八年菊の花薫る朝

久松潜一

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

編者のことば

古典は、何よりも読者みずから読み味わうべきものである。しかし、古典は、用語の上からみて、われわれのものと異なっているだけではない。その背景をなす時代の環境からいっても、またちがっている。われわれと異なった時代の中にあって、ちがった言語を用いて、おのおのの作家経験を語っているのであるから、簡単に読み味わうことはできない。永久に変らない日本人らしい情感を歌った詩歌にしても、その用語の一つ一つについては、まして、それがさし示す具体的な事実については、われわれの表面的な理解を越えるものがある。特別なふんい気の中にあって、時代に特有な、その時代を背景とした個人に独特の生活経験、社会的思考感情を書きしるしたものにいたっては、その理解には、それ相当の用意がいる。それを誤りのないものとするためには、確かな方法が必要である。その方法が科学的で、その理解が正しく行われてはじめて、作品のじゅうぶんな味読が行われるのである。まして作品の単なる理解以上に、その古典の持つ社会的歴史的また国民的世界的な意義を探るためには、そのための手続が厳正に行われなければならない。

過去の注釈作業は偉大なものであるが、そのかげには、学者のひとりよがりがなくはなかった。それぞれの流派・学派・思想的宗教的立場などからくる行きすぎた理解。直観的な思いつきを合理化した独断的な結論。こういう見解に対しては、長い間の学者の研究によって、文献学的、語学的、文芸的、思想史的な、さらに社会的歴史的立場からする是正がなされている。作品をほんとうに読み味わうためには、そういう広い学問的業績にささえられる必要がある。

しかし、現実は、まだ、過去の文学理解の方法が、あるべき文芸味読の手続の道をさえぎっている。

つれづれ草の注釈に、どうして、月の異名の語源が必要なのであろうか。これは、古注のくせが流れこんでいるだけである。源氏物語の注釈書を読めば、その伝記に必ず、文人に富む家系の優秀さが説いてある。これは、紫式部の天才の遺伝的証拠をあげているにしかすぎない。万葉集を読めば、同じ単語で、最近の訓読本でも、ほんの数年さきのものと比べて、清濁の読みようがちがっているものがある。これは、精細な語学的研究の成果が、そのまま訓読の中にはいりこんでいるからである。これらは、過去のなごりと、現代の学問的研究の混合した姿である。過去のものは、必ずしも整理されていず、新しいものは、まだその存在の位置づけができていない。それらは、どういう意味をもっているかが全体的に理解されていず、その個々のものにいたっては、その必然性のわからない場合がある。作品の理解のためには、とりのぞくべき方法はとりさり、とりいれるべきものはとりこみ、同時に、そういう作業自身も適正なものにしてゆかなければならない。

この小さな辞典は、真の味読を、現在の正しい方法によって裏づけてゆこうとするものである。そのために、「総説編」において、読解の方法、その結果の発表のしかたについて論じ、「作品編」において、主要なる古典の一つ一つについて味読の方法を文例・年譜などによって具体的に示し、「環境編」において、読解の基礎となり読解を確かなものとする知識の大要を与え、「用語編」において、古典の用語・文体・修辞法について概観した。なお、別に「古典読解要語集」を添えて古典の重要な単語につきその意味・用法・文例を説明し、そのあとに「参考図録」を付して全体の解説を助け、さらに「古典文学年表」を加えることによって文学史の年代的大観ができるようにした。その作品の選び方、事項の範囲は、また、教養ある日本人として読むべき古典の範囲、身につけるべき知識の一つの目安をつけたものと信ずる。大学の国語国文学専攻の学生はもちろんのこと、高等学校の上級生、特に中学校・高等学校の先生がた、また一般の国語国文学の教養を得ようとされる人たちのよき入門書・参考書として活用

されるよう望んでやまない。

以上の試みの実現にあたって、編者は、最近の国語国文学界また中国語中国文学研究が到達した水準を紹介すべく努めた。小さいけいもう的な書物ではあるが、そういう冒険的な努力をあえて試みた。いくぶんかそれを達成しているとすれば、それは、現在の学界のすばらしい業績のたまものである。藤村作、橋本進吉、久松潜一三先生はじめ恩師・先輩学者の学恩、ひいては過去のいくたの先学に深くお礼のことばをささげるとともに、偉大な進展をもたらした現在の国語国文学界、関係学界のかたがたに深く感謝の意を表する次第である。なお、この書物の完成については、増山新一・石井良介両氏そのほか東京堂編集部のみなさんのいつも変らぬ編者に対する激励と忍耐とに深く謝意を呈したい。

昭和二十八年十月

例　言

一　編集の方針

この辞典は、大学・中高等学校における古典読解のための方法と技術を説明すると同時に、その基礎知識として必要な、作品の解題、作家の伝記、環境・背景をなす事物の解説、ならびに用語の解釈等を総合したものである。

二　項目の配列

項目は、現代かなづかいによって五十音順に配列した。なお、体系的な関連が一目でわかるように、巻頭に分類項目表を掲げた。

三　解説の形式

項目の解説には、それぞれに応じて、【定義】【説明】【特徴】、あるいは【作者】【書名】【成立】【諸本】【内容】【用語・文体】【読み方】その他の小見出しをつけて、平易簡明に叙述した。

四　用語・表記法

文体・用語は、なるべくやさしい口語体のものにした。かなづかいは、現代かなづかいによったが、用例の文のふりがなは原則として、歴史的かなづかいに従った（それを示すために特に＊印を用いた箇所もある）。漢字の使用は、当用漢字表・同音訓表を基準としたが、用例の文はこの限りでない。範囲外の漢字にはなるべくふりがなをつけた。字体についても、当用漢字字体表によったが、必要に応じて旧字体を用いた。

五　参照項目

関連のある項目を示すために、本文中の語句については、〈別項〉〈各別項〉「……」の項〉を用い、全般にわたるものについては、項目の本文の終りに⇩をもって示した。

六　参考文献

項目の終りに参考書の欄を設けて、主要な参考文献を列記した。

七　要語集

古典読解のため、主として文法に関係する重要語を集めて、豊富な例文によって詳説した。

八　図録・年譜・年表・索引

説明を補うために参考図録を、作品や作家を展望するために年譜・年表を掲げた。また、検索の便をはかって、巻末に「事項索引」「文例索引」を付した。

分類項目表

総説編

古典研究学習の方法……二二
解釈・鑑賞・批評……二六
古文読解の方法……二五
辞書の引き方……二六
注釈書の用い方……二九
書目・索引の引き方……二四
古写本・古版本の読み方……三〇
難読の年号・書名・人名の読み方……四五
古典解釈文法……三〇四
口語訳のしかた……一六九
語義・語意・言換え……一七四
生活史学習の方法……三八
漢文研究学習の方法……八五
論文の書き方……六九

作品編

神話・伝説の読み方……三〇八
古事記……一八九
歌謡文学の読み方……六八
*記紀歌謡……七三
*四　譜……七三
*和漢朗詠集……七三
*梁塵秘抄……七四
*宴　曲……七四
*閑吟集……七四
和歌の読み方……六四
万葉集……五九〇
古今集……一八一
新古今集……二九
*三夕の歌……三〇六
物語の読み方……六四
竹取物語……三四九
伊勢物語……四
*大和物語……六八
*平中物語……六九
*落窪物語……六九
*宇津保物語……六九
源氏物語……一六〇
*浜松中納言物語……六九
*狭衣物語……六〇
堤中納言物語……四二
*住吉物語……六〇
*とりかへばや物語……六〇
*松浦宮物語……六〇
*石清水物語……六〇
歴史物語の読み方……六二
*栄華物語……六三
*大　鏡……六四
*今　鏡……六四
*増　鏡……六五
日記文学の読み方……四九
*漢文体日記……四一
土佐日記……四九
*蜻蛉日記……四二

〔*印は、見出語の中に小項目として含ませたもの〕

* 和泉式部日記……四六二
* 紫式部日記……四六三
* 讃岐典侍日記……四六三
* 建春門院中納言日記……四六三
更級日記……三六
随筆文学の読み方……三四
枕草子……五四
方丈記……五九
つれづれ草……四九
紀行文学の読み方……九六
* 海道記……一〇〇
* 東関紀行……一〇〇
* 十六夜日記……一〇〇
軍記物語の読み方……一四一
* 保元物語……一四五
* 平治物語……一四六
平家物語……五九
* 太平記……一四七
* 曾我物語……一四九
* 義経記……一五一
説話文学の読み方……一三三
* 日本国現報善悪霊異記……一三九
* 今昔物語集……一三〇
* 十訓抄……一三四
* 古今著聞集……一三五
批評文学の読み方……一五〇
* 無名草子……一五四
* ささめごと……一五四
* 世阿彌二十三部集……一五四
連歌の読み方……一六六
謡曲の読み方……一六四
狂言の読み方……一〇八
中世後期小説（御伽草子）の読み方……一九三
南蛮文学（キリシタン文学）の読み方……一四三
近世小説の読み方……一一八
* 仮名草子……一一八
西鶴の浮世草子……一一七
* 黄表紙……一一九
* 洒落本……一一〇
* 読本……一一〇
雨月物語……一一三
* 合巻……一一一
* 人情本……一一一
* 滑稽本……一一一
俳諧の読み方……一四一
* 連句の読み方……一四〇
* 俳句の読み方……一四七
芭蕉の俳句……一四七
蕪村の俳句……一五一
一茶の俳句……七
俳文の読み方……一四四
奥の細道……一七
* 鶉衣……一四五
浄瑠璃の読み方……一六八
近松の浄瑠璃……一六一
歌舞伎脚本の読み方……一五一
狂歌・狂文の読み方……一〇五
川柳・雑俳の読み方……一三七
雅文・擬古文の読み方……一六一

環境編（「参考図録」参照）

〔社会制度〕
氏族制度……二四
荘園制度……二五
封建制度……一五六
* 江戸時代の身分関係……一五八
武家社会……一五六
町人社会……一四四
〔経　済〕

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

貨　幣……六七
＊江戸時代の貨幣の種類と換算法……六八
〔風　土〕
風土・風景……五〇五
平城京……五五一
平安京……五三七
内　裏……三四八
大　阪……二四四
江　戸……一八
〔生活圏〕
貴族生活……一〇一
武家生活……五一八
町人生活……四一七
寺院生活……二三四
隠者生活……一〇
＊中世草庵の生活……一一
年中行事……四六七
祭……五八八
＊有職故実……三一九
〔官職制度〕
官　職……七九
＊公家官制……八〇
＊四等官表……八二
＊僧官・僧位・僧職……二三五
＊武家職制……八三
〔交　通〕
上代の交通……二五九
中世の交通……二九七
近世の交通……一三六
〔衣食住〕
住　居……二四八
服　飾……五〇八
整　容……三一
武　具……五〇六
食　物……二八九
〔戦　乱〕
壬申の乱……三〇七
保元・平治の乱……五六五
承久の乱……二五六
〔宗　教〕
経　典……一一三
加持祈禱……四六
陰陽道……二四
〔方位・暦年・時刻〕
方　位……五五五
十干・十二支……二四五
十二か月の呼び名……二五三
日の呼び方……四九九
時　刻……二三六
〔芸　能〕
楽　器……四八
香　道……一七三
茶　道……三二五
書　道……二九一
絵巻物……一九

用語編（「古典読解要語集」参照）

〔時代語〕
上代の国語（音韻・語彙・語法・敬語・文体・方言）……二六一
中古の国語（〃）……二三六
中世の国語（近古の国語）（〃）……二九七
近世の国語（〃）……二九
〔位相語〕
文　体……五三〇
＊日本最古の文章……五三四
＊歌　体……六四一
＊中国文学の諸体……九〇
＊経典と文学……一一六
敬　語……一五四
あいさつのことば……三

地の文と会話の文……二四六
贈答歌……三四四
慣用語……九二
やまとことば……六三三
漢　語……七五
＊中国語……八九
仏　語……五二八
故事成語……二〇〇
外来語……三九
武家のことば……五一四
女房詞……四六四
奴　詞……六二一
雅　語……四五
俗　語……三四五
歌　語……四三
＊東国方言……二三五・三八七・四〇九
＊中国方言……四〇九
＊九州方言……四〇九
＊京坂語……一三九
＊江戸語……一三九
〔修辞法〕
枕　詞……五七一
＊序詞……五七二
懸　詞……四二
縁　語……二三
＊歌枕……五〇六
引　歌……四九七
本歌取……五六九
季　語……九五
切　字……一一六
〔注意すべき語句〕
＊「あはれ」の歴史……一六八
＊「秋の夕暮」……九四
＊「をかし」の用法……四二四
＊「をかし」と「笑ふ」……五八四
＊「みやび」「風流」……一〇四
＊「幽玄」の歴史……六三〇
＊「さび」「しをり」「ほそみ」「かるみ」……四七五
＊「義理」「人情」……一三四・二六八
＊「物」の語義……三二七
＊「もののけ」……四七
＊かさねの色目……五二二
＊「通」「しやれ」……二一〇・二三五
＊「よく」と「よし」……四二七
＊助動詞「なり」「に」の用法……三二一
＊助詞「を」の用法……三五五
〔文　字〕
＊用字法（万葉集）……五九三
＊漢　字……八九
＊万葉がな……五三一
＊かな……五三二

年譜編（「古典文学年表」参照）

＊古事記年表……一九四
＊万葉集年表……六〇八
＊紀貫之年譜……四四一
＊土佐日記旅程一覧……四四〇
＊源氏物語年表……一六二
＊紫式部年譜……一六二
＊枕草子事件年表……五八二
＊鴨長明年譜……五六〇
＊つれづれ草年表……四三〇
＊西鶴年譜……三三
＊浄瑠璃各派系統図……二八〇
＊近松作品年表……三六四

＊芭蕉年譜……四九〇

古典読解 要語集

（要語集の配列は歴史的かなづかいによる）

〔敬語動詞〕

あそばす……六四九
いたす……六五〇
います……六五〇
いますかり……六五一
いまそかり……六五一
うけたまはる……六五一
おはさうず……六五二
おはさふ……六五二
おはしまさふ……六五三
おはします……六五三
おはす……六五四
おぼしめす……六五五
おほす……六五五
おぼす……六五六
おほとのごもる……六五六
おまします……六五六
おもほしめす……六五七
おもほす……六五七
きこえさす……六六九
きこしめす……六七〇
きこゆ……六七〇
ごらんず……六七九
さふらふ（さうらふ）……六八一
さぶらふ……六八二
しろしめす……六八七
そろ……六九二
ぞんず……六九二
たいまつる……六九二
たうぶ……六九三
たてまつる……六九四
たばる……六九六
たぶ……六九六
たまはる……六九七
たまふ……六九七
つかうまつる……七〇三
つかまつる……七〇三
のたぶ……七二一
のたまはす……七二一
のたまふ……七二三
はべり……七二六
まうさす……七三一
まうす……七三一
まうづ……七三二
まかづ……七三三
まかる……七三三
まします……七三七
ます……七三八
まつる……七三八
まゐらす……七四〇
まゐる……七四〇
まをす……七四一
みそなはす……七四四
みそなふ……七四四
みまそかり……七四四
めす……七四七
ものす……七五一
わたらせたまふ……七六六
をす……七六八

〔敬語補助動詞〕

あそばす……六四九
おはさうず……六五二
おはします……六五三
おはす……六五四
おまします……六五六
きこえさす……六六九
きこゆ……六七〇

さぶらふ（さうらふ）……六八一
さぶらふ……六八二
そろ……六九二
たいまつる……六九二
たうぶ……六九三
たてまつる……六九四
たぶ……六九六
たまはる……六九七
たまふ……六九七
つかうまつる……七〇三
はべり……七二六
まうす……七三一
ます……七三八
まつる……七三八
まゐらす……七四〇
まをす……七四一
めす……七四七

〔助動詞〕

き……六六七
けむ……六七四
けり……六七五
ごとくなり……六七八
ごとし……六七八
さす……六八〇
じ……六八四
しむ……六八五
す……六八八
ず……六八九
たがる……六九三
たし……六九三
たり……七〇〇
つ……七〇一
なり……七一四
ぬ……七一八
ふ……七二八
べし……七二九
べらなり……七三〇
まし……七三四
まじ……七三五
ましじ……七三七
まほし……七三九
む……七四四
むず……七四六
めり……七四八
やうなり（相当句）……七五四
ゆ……七五五
らし……七五九
らむ……七六〇
らる……七六二
らゆ……七六三
り……七六四
る……七六五

〔助詞〕

あひだ……六四九
い……六四九
か……六五八
が……六六〇
かし……六六二
かな……六六三
がな……六六四
かは……六六四
かも……六六四
がも……六六五
がもな……六六六
がもや……六六六
がもよ……六六六
から……六六七
こそ……六七七
さへ……六八三
し……六八四
して……六八五
しも……六八七

すら……六九〇
そ……六九一
ぞ……六九一
そら……六九二
だに……六九五
だも……七〇〇
つ……七〇二
つつ……七〇四
づつ……七〇四
て……七〇四
で……七〇五
と……七〇五
ど……七〇七
といへども（相当句）……七〇七
とも……七〇七
ども……七〇八
な……七〇八
ながら……七一〇
な…そ……七一〇
など……七一一
なむ……七一三
なも……七一三
に……七一五
にて……七一八
ね……七一九
の……七二〇
のみ……七二二
は……七二三
ば……七二四
ばかり……七二五
ばし……七二六
ばや……七二八
へ……七二八
まで……七二九
も……七二九
ものから……七二九
ものの……七二〇
ものゆゑ……七二一
ものを……七二二
や……七二二
やは……七二四
やも……七二五
やらむ……七二五
ゆ……七二六
ゆり……七二六
よ……七二六
より……七二七
ろ……七二六
ゑ……七二六
を……七二六
〔接尾語〕
がてら……六六三
がてり……六六三
く……六七一
げ……六七四
さ……六七九
み……七四三
らく……七五七

参考図録

〔風土・住居・交通〕
旧国名地図……七八〇
平安京……七六九
大内裏……七七〇
内裏……七七一
清涼殿……七七二
寝殿造……七七三
廂……七七四
几帳……七七四
格子・妻戸……七七四
燈台……七七四

〔分類項目表〕

檳榔毛車……七六
網代車……七六
〔服飾〕
女官正装……七六
小袿……七六
文官束帯……七五
衣冠……七五
直衣……七五
直垂……七五
狩衣……七六
水干……七六
半臂……七七
下襲……七七
裾……七七
袒……七七
〔武具〕
冑……七八
鍬形……七八
鎧……七八
草摺……七八
袖……七八
鳩尾……七八
栴檀……七八
〔時刻・方位〕
時刻……七八
方位……七八
〔楽器〕
和琴……七九
篳篥……七九
笙……七九
琵琶……七九
鞨鼓……七九

古典文学年表

古典文学年表……七八
*文学史書目……八二

索引

事項索引……八五
文例索引……八六

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.